

2030年の社会と子供たちの未来

東京都立晴海総合高等学校
キャリアカウンセラー

千葉吉裕

平成28年12月21日、文部科学省中央教育審議会から、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」が答申されました。この答申を受けて、幼稚園、小学校、中学校は平成30年度から、その答申に沿った教育を先行実施または全面実施、高等学校は平成31年度から、先行実施します。学校教育に直接関わっていない人は、あまり興味を持ってない話かもしれませんが、今期の改訂は、教育現場だけではなく、社会全体に大きな影響を与えると予想しています。

学校教育は、将来を見通して十年ごとに大きく改編されます。何をどのように変えるのかを検討するために、文部科学大臣が中央教育審議会に対して諮問し、長期間にわたって有識者が議論し、答申をまとめていきます。その際、多くの調査結果や、現場の視察、国際比較、関係団体からのヒアリングなどを踏まえてエビデンスを整えて、議論されます。

一方、答申後は、その答申に基づいて、学習指導要領が改編され、学校は、その学習指導要領に基づいて、教育課程を編成し、校長をはじめとする教職員は、保護者や地域と協力しながら、答申の理念を実現していくことになるわけです。学校は、「教科書」を「使って勉強するところ」だと思っている人が少なくありませんが、「教科書」で「教育を行うところ」であって、単に知識を伝授する場所ではありません。教科書は、教育を行う一つの道具でしかあり

ません。大学入試問題が教科書に沿った内容を元に作成されるため、教科の内容に焦点化しがちですが、教育の目的は、子供たちが将来、社会で活躍し、よき人生を創造できるようにすることです。

教育は、多くの人が体験したものを伝統芸能のように継承していく「過去志向」ではなく、「未来志向」で行われています。平成26年11月に下村博文文部科学大臣（当時）の諮問では、冒頭、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は、厳しい挑戦の時代を迎えていると予想されます。」と述べています。大きな社会の変化を予想し、厳しい環境の中でも生き抜ける子供たちを育てるために、「新しい時代に必要となる資質・能力」を検討し、育成する方法について論じています。

この諮問を受けた答申では、「2030年の社会と子供たちの未来」という章を立て、2030年頃の社会を見据えようと努めています。その章には「インターネットや人工知能による情報技術の飛躍的な進化」と、「グローバル化が進展する社会」について記されています。複雑で予測困難な時代が到来し、そうした変化は、子供たちの職業選択や人生選択に大きく影響することになります。ともすると、不安になってしまいうえですが、この変化を前向きに受け止め、自信を持って自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくような態度を身につけることの大切さを強調しています。

この新しい教育を受けた子供たちが社会に出るのは、早くとも5年以上先の話ですが、予想される変化はすでに到来しており、我々の生活を少しずつ変え始めています。新しい教育の実施を待つよりも、現行の教育を受けている児童生徒も、先取りできることは先取りしながら新しい時代にあつた教育を行っていくべきだと思います。また、多くの人たちが新しい時代を想像し、新たな時代の準備を多くの人が進んですべきではないでしょうか。ビジネスの世界では、年齢の差より能力の差が重んじられます。「新しい時代に必要となる資質・能力」は、子供たちだけに求められるものではなく、これから時代を生きる上で欠かせない資質・能力となるでしょう。次の世代に追い越されないように、危機意識を持って、対処することが重要です。

新しい教育を受けた人材が登場すると、社会では「新人類」と揶揄されがちです。しかし、これまで静かに黙って知識を記憶することが多かった古い教育ではなく、対話による参加型授業の中で、新しい事物を創造したり探究したりしながら知識を活用する授業を受ける新人類は、揶揄されるよりも羨ましがられる存在になるのではないのでしょうか。

どのような背景で、どのように教育が変わろうしているのか、是非、教育関係者以外の方も、文部科学省のHPに掲載されている答申を読んでみてください。